宗像

毎月一日発行
定価一年送共250円
発行所
宗像大社社務所
福岡県宗像郡玄海町田島
電話 神湊 26の甲

いよいよ万葉歌碑が完成した。晴れ上った二月十一日、神社では早朝「建国祭」が斎行された。これに引き続いて十時より万葉歌碑の奉納祭がとり行われた。参列者は起人二十名、右歌碑の奉納に至るまでの迂余曲折がかえりみられて何れも感ともどもであった。終って十時半より、東参道の釣川沿いの県道より神社に入る入口のロータリー内側に建設された歌碑の前で盛大な除幕式が挙行せられた。参会者、郡内有志、歌碑資金寄贈者等百余名をはじめ、宗像大社剣道部の少年二十名、田島幼稚園児会員

最初の褐暗者である戸畑の伊規須ゆきさん（赤間出身）の手によって感激の除幕が行われた一瞬期せずして拍手が湧き起った。

幼稚園児の花束捧呈、剣道部少年らの「鐘の岬」の朗詠などが力強く合唱された。特に永島計七委員よりの経過報告の中にもあった通り、二首共に交通関係の歌であったことは交通守護の全国総主宰神でもある当宮の御神徳と思い合わせられるものがあり、歌碑の巨岩が釣川上流の吉武の山中から発見せられたことにも興味深いものがある。終って田島小学校講堂に於て盛大な祝宴を張った。

左に歌碑の解説をしるしておくまことに味わいの深いものがあります。わが国でも最初に古代文化の栄えた神郡宗像の中心である宗像大社にこれを奉納できますことは、何ものにも代え難い喜びであります。

第一首目の短歌

ちはやぶる　鐘の岬を　過ぎぬとも　われは忘れじ　志賀のすめ神

これは詠み人知らずです。その昔の船人が筑前最大の難所であった鐘の岬の海を通った時の歌です。

「私は今ようやく宗像の大神さまの御領海である鐘崎の海を過ぎようとしていますが、それにつけても、さきに志賀海神社の皇神さまに航海安全の御加護をお祈りして船出した時のことを忘れることはできません」

海上をつつしんで航海した古代人の素朴な心情がうかがえる歌です

第二首目の長歌

大汝　少彦名の　神こそは　名付けそめけめ　名のみを　名児山と負ひて　わが恋の　千重の一重も　慰めなくに

これの詠み人は大伴坂上郎女といい、当時（約千二百年前）太宰府の長官をしていた大伴旅人の妹にあたる人といわれます。都から太宰府へ旅をしての帰り途に

「冬十一月大伴坂上郎女筑前国宗形郡名児山を超える時に作れる歌」

と前書きのある歌です。

これは今の勝浦から田島へ越える名児山の道にあたるといわれます

歌の意味は

「おおなむち（大国主命、すくなひこなの神という国造りの神さまが最初に名付けられたのであろう、この、人の心を和めるという感じを持つ名児山、名前だけからは容易に越えられそうな山路のようだが、今ここに実際に歩いてみると仲々けわしい。

そうしてみますと、この分では私の恋のつらさの千分の一も慰められそうにもないような気がいたします。なぜなら、名児山というやさしい名のついている山がこんなにけわしいのですもの」

この長歌には女性らしいやさしい心の調べが余韻を残しています。

いちいち歩いて越えたであろう昔の旅路のつらさも、この恋の歌になったことによって風雅な趣を伝えております。

わが懐しい郷土宗像の風物を詠んだこれらの歌は、深く深く私たちの胸を打つものがあります。まさに無形の文化遺産とも申せましょう。（尚、揮毫は久保宮司）

昭和三十七年二月十一日

宗像郡名児山を超える時に作れる歌

宗像郡名児山を超える時に作れる歌

宗像大社御用達

装束祭神具

松島神輿製作所

京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

宗像大社　萬葉歌碑除幕式挙行！

宗像大社　万葉歌碑について

宗像大社の万葉歌碑に刻まれた二首の歌は、万葉集巻六と巻七に出ているもので、いずれも宗像郡にゆかりの深い歌です。

昭和三十六年の春、有志が発起人になって各方面に呼びかけ、丁度一年間かかって完成しました。二首とも歌意清純、余韻嫋々として

私は若い頃裁判官をやっていた。そして若い頃から頭髪が禿げていた。負け惜しみではないが、私は禿頭の男に悪人はないとの持論をもっていた。逆は必ずしも真ならず、頭髪の濃い人が悪人とは限らないが、斧定九郎、石川五右門や自雷也がつるつる坊主では芝居にならぬ。

法廷に於ける被告人（刑事事件）の人相を数多く実見して私の持論は概ね肯定されていた。

ところが或る日の強姦致傷事件の被告人が法廷でパッと深編笠を脱ぐと何とあるべき眩ゆき光彩陸離たる光頭氏ではないか。私はハッと胸をつかれた思いがした。じっと側目も振らず被告人の顔を凝視しているが、左右の若い両陪席判事両君は一裁判長目頃の持論は破れたり矣！と声にこえ出さぬが、内心快哉を叫んで互にウインクしあっている気配がよく読み取れる。

裁判官は常に冷静を要してはいけない。幸か不幸かこの被告人は犯行を素直に認めて審理は滞りなく済んだが、納らないのは私の胸のうちだ。最後に被告人の目下の心境を書くべきだりになって私は思わず被告人に対し「そちらのこの禿頭被告氏は実に頭の禿げたものの面汚しだな」と云ってしまった。これがせめてもの私の多年信奉して来た持論と信念を裏切られた余憤の一端であった。両陪席判事も立会検事、弁護人諸君はこの一言に面を伏せて唇を噛みしめて笑いをこらえて居る様子であったが、当の被告人は「誠に年甲斐もないことで申訳ありません」と低頭してあやまったが、頭の「禿げている男」という私の特別な言葉はいかにも解しかねるといった顔つきで私の顔をまじまじといつまでも見ていた。やがて私にも迎憂の時期が来た。世話する人が一度お見合をと云われたがイヤ私はそんな暇はない。私は常時公開の法廷で顔をさらしている者だから見たければ何時でも傍聴人にまぎれて御覧下さいと返事しておいた。相手はいつか私を見たらしい。妻はあとで浜玖結婚だとわずが私はこの抗弁は理由なしとして採用しない。何故なれば私は当時定の正服を着用し公開正大等厳命公に公務の執行中で殊更に他人を錯誤に陥れたり又は欺罔するが如き悪意や犯意は毛頭なかったからである。

（随筆集たばこの吹殻から）

筆一　随

禿頭禍

加藤禿峰

阿蒙少言

学校出の秀才は仕事もよく出来るし事業上の知識の伸びもよく頼もしいが、人間的なゆとりが少く雅味を解しない者が増えゆくのは残念だと某大会社の重役が語っていた。実利主義偏重の今の世情が学生時代から泌みこんでいるからだろう。秀才もいけない鈍才は更にいけないとなると何が必要なのか●職場の仕事に情熱を失い積極性がなくなると、周囲の人を始み不平不満を言い出す。嫌な仕事に煩冠をしたり巧に逃げたりするようになれば職場での値うちは既に半額に下落●力量以上の注文を持ちこまれて四苦八苦、やっと片づけられたらそれが力量以上に評価されて次々に重荷が加わる場合がある。こゝにゴマカシが起る、力量以下の椅子の安らぎは下位番付に落ちた力士のアセリのない述懐に通じるものがあろう。●結婚して門司港発船、海の初旅、神戸港上陸後外人をつかまえた婿どんが三宮駅に到る道をたずねる。わざわざ外人に道を教え注意深く嫁どんは人生航路の出発点で驚きも し、心細さも感じたが、爾来三十年風浪の中難航が続いた。これは或る老夫人の物語。女の一生は哀しきものなりと諦観するものの如し●夫婦の二人三脚数十年はお互に大変なことだと先輩が教えたことがある。特に若い間は二人揃って折々動物園へ行く。猿をはじめどの動物を見ても大抵その顔はまずい、喫さんが甚だ美人に見えてくる、夫婦和合に役立つと、亭主旅だけうぬぼれてはいけない。逆もまた真なり、女房族も猿公よりは遥に美男と安堵するだろう。●冬が去った、春が来た、人間の心にも色々な花が咲く、大地の花のみ清く美しい、違うかな。

（白雲）

寸言一　宗像神社と宗像会

去る二月二十五日、八幡宗像会の席上、安永渡辺会長が神社から出席した檀宮司の肩に手を置いて「宗像会は宗像神社を中心にしてやっとりますばい」と一言いわれた。帰社してから檀宮司いわく「みんな、しっかりせにゃ全国の宗像会員に申し訳ないばい」

第十一回　宗像大社献詠歌会詠草

37・2・4　於社務所（詠草到着順）

田島　三苫　重格

散りしきし楢もみち葉に彩なしてそゝぐしぐれをわれは見て過ぐ

神湊　隣船　俊

客となり清涼寂門庭銀茶の窓心静かに松風の音

田島　宇都宮　弾

赤く青くこもゞ光る波止の灯に何とはなけれ春の季動く（天島）

深田　中野　節子

御土産のかまぼこ浮かる朝の汁急げる子等の笑みて賑る

戸畑　田中ハツセ

四季折々の花に彩しい公園の廃地となりて赤土の丸ゆ

宮田　片山　朔子

長男の成人の日赤飯焚くくちなしの実に指先を染む

内浦　長畑　房江

かゝる事も夫は知りたまま温ぎしを干すときいたく手の冷めたきを

勝浦　永島　計七

霙降るをうつゝともなく聞くわれは朝寝の夢を床深く見る

京都　鈴木日出年

初春の浴かすみゆく人のうらゝくに流れやまもも

戸畑　花田　道子

戸を叩きひさしをはらふ吹雪く夜に雷鳴とどろき天さはぎたつ

宮田　北原きみ子

流れ来る鶯一節に山裾の村を包めりくれ急く道

勝浦　永島　文子

ほのゞと暁の煙立ちのぼり子等はしやぎ居る雪の一つ家

吉武　立石ろせ

風呂焚きて帰の運き吾子を待つ霰の音のしきりなる夜

吉武　立石　昇

店頭に振り子の虎が首振りて新しき年の意慾を感ず

宮田　片山　一

赤き土層にブルドーザーの強靭にいど立音きさつ夕かへり来る

勝浦　永島　文子

ほのゞと暁の煙立ちのぼり子等はしやぎ居る雪の一つ家

吉武　立石ろせ

風呂焚きて帰の運き吾子を待つ霰の音のしきりなる夜

吉武　立石　昇

店頭に振り子の虎が首振りて新しき年の意慾を感ず

宮田　片山　一

赤き土層にブルドーザーの強靭にいど立音きさつ夕かへり来る

田島　滝口主米蔵

心しづめ安全運転祈るわれを幸ひ給へ宗像大神

沖島　前田商之助

遠き人のたより届けば沖島の淋しき暮しまぎれゆくらし

戸畑　伊規須ゆき

武蔵野の寒き老畑のきゆくに雲の涯にもかゝる山を見ず

吉武　原田　リノ

石のこと冷たき手をば握りしめ暖めやるに孫は振り切る

江口　辻野　開造

父祖以来わがうけつぎし宝田の土の香りを我を活かしむ

香椎　桜井　秀

朝かげに光りの露を飾る道この静けさに今日も来て佇つ

香椎　桜井　ツ子

母と子の別離のことば隣てつゝ非情の車窓のにくき涙明（特急さくら）

戸畑　山磨　昌子

鉢植のあおいの花をまゝごとの御馳走にして子等は明るし

原町　中村　幸

二三日遊びほうけし幼らの赤き子凧風船部屋にころがる

田島　久保　輝雄

テレビ見る児等一斉に我を見るピールの宣伝いやにしっこし

田島　神戸　幸夫

斑雪も今朝は早や消え春立つと老紅梅の蕾ふくらむ

田島　難波江通泰

日の御旗うちかさしたて離辺の老木の梅に春の寄るを見つ

田島　小野　迪夫

幼きが幼き絵を描けるら年かさなるが笑ふ声する

津屋崎　麦野　時雄

この秋も裏参道のさいかちがふさ〳〵なりて人の目につく

福間　瓜生あさえ

五十肩や白髪染めと語り合ふ友のつどひに春の日うらゝ

宗像大社、鎮国寺の案内標識完成

——東郷橋畔——

昨年十月放生会の頃、宗像町東郷の商工会関係者の勧奨があって、大社と鎮国寺が東郷の町筋の水銀灯建立に加わった。これ迄の木柱街灯を鉄柱水銀灯に近代化した訳である。やがて完成したところへ、大社と鎮国寺で相談して、写真でごらんの通りの案内標識をとりつけることにした。正月にはいってから漸く完成。神社側からも幾分か安心して貰えそうである。

（写真は案内標識）

国道の東郷橋と大社の大鳥居の中間に矢印がつけられた道標は門司の方から来ても福岡の方から来ても目につくようになっている。これ迄、遠方からの参拝者から始終「宗像大社はどこですか」と聞かれます」といっていた近所の方々もわいゝ思いをしただろうと思われる。

三月祭事表

一日　月次祭　十時

二日　孔大寺神社祭

孔大寺山上に鎮座せられる旧真社孔大寺神社の春祭。本宮より職員が献幣する

十五日　月次祭　十時

境内末社松尾神社祭。北筑（宗像郡、粕屋郡、糸島郡及び福岡）の杜氏組合の主催により醸造祈願を捧げて感謝祭を行う。この祭は先に年末につくりこみ祈願祭を行った奉饗（御礼）祭である。ちなみに、当宮の御祭神市杵嶋比売命は酒造守護の全国総主宰神におわします。

中旬　松尾神社祭

十一日

廿一日　春分祭　十時

皇霊殿遥拝式　俗に彼岸の中日にあたる。宮中では春季皇霊祭が行われる。一般家庭に於てもこの春分の日を中心にして祖霊を祭り、子孫としてのまごころを捧げる。

中津宮旧正月大漁祈願祭斎行

中津宮では大島の漁業関係者と相談して旧正月元旦を期して大漁祈願祭を斎行した。漁協の遠藤組合長。古川専務をはじめ全組員の協力は勿論、全島民の理解によって無事終了した。

中津宮さまは全国的な海上守護神であり、各地の関係者からの祈願申込みはあっても、地元の大島からは全島一丸となった大漁と安全の祈願がなかったことにかんがみて、これまで個々の信仰対象であったものを一本に纏めようということになり、旧冬から着々と準備が進められて来たものである。

当日参集者組合長以下百余名、わざわざ田島から馳けつけた久保宮司を斎主として盛大な祈願祭が斎行された。終って社務所に於て懇談会が催された。関係者一同の喜ぶ顔が明るかった。

「中津宮さまは皆様がお守りする神様であり、また皆様をお護り下さる神様です。今日のことが実現したのはお互いに喜しいことです。どうぞよろしくお願い致します。」

宮司が挨拶をすると、

「お陰さまでみんなが気を揃えて御祈願をさせていただきました。この明るい気持が今後の仕事にも生活にも好い影響を及ぼすに違いありません。」

と謝辞をのべた組合長の目も光っていた。

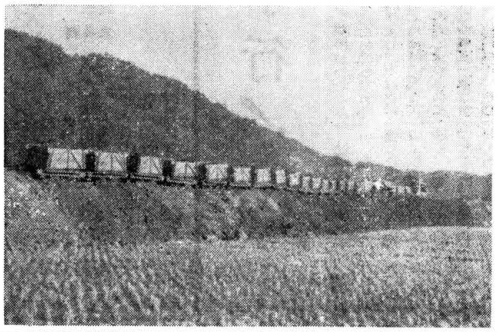
隣接買収境内地の埋立始まる

——大社東側及び北側の祖霊社——

昨年来買収すみの境内東側農地の埋立てが土木事務所の手で始まった。施工者は釣川県道改修工事担当の真鍋組である。

買収境内の広さはおよそ三千四百坪で、これは将来、更に拡大の見込みがあるようである。

丁度境内北端に隣接する宗像郡祖霊社の社務所新築のために、土盛り用の埋立も同時にはじまった。早春、大社の境域附近には発展のための槌音がこだましている。



（写真は埋立て風景）

宗像談話室　屁理屈

一、ホテルにて

ホテルも一流ともなれば食事の時間がきまっている。否、食堂の開いている時間さえもきまっているのだ、そうである。

白髪の爺さんと若い衆の二人がその食堂の入口でボーイと問答をしている。

「どうかね、まだかね」

「まだです」

「しかし、中に入るということだけでもいけないかね」

「え、、まあ本当はいけないのでしょうが、——よどさんです。お休みになるだけでしたらどうぞ」

かくして二人はカウンター（酒壜のズラリと並んでいる）の前に陣取った。サイダー（アサヒ、サッポロの類）が目についた。

「そのサッポロサイダー、それを目の前に置くだけならば、どういうもんかね」

「はあ、置くだけでしたら」

ボーイが困ったような顔をしながら二三本取り出した。

「時にボーイさん、これを眺めているといい気持だね」

「はあ、そうですか」

「時にボーイさん、この壜の中味を飲むということはいけないことですね」

「はあ、まだ時間になりませんので」

「そうですか、飲むことはいけませんか、しかしボーイさん、この中味をわれ〳〵の胃袋に移す、ということは飲むこととは違うように思いますがね」

今まで相手をしていたボーイ氏、仕方なさそうに思い切って

「さあ〳〵どうぞ」

二、立派な御婦人

二月初め広島観光バスのガイド嬢二十数名が来社した。聞いてみると毎月のように臨時貸切バスが当社参拝の為に出ているので、神社の概要を説明して貰うために来たとのことである。

目の前に多勢の別嬢さん（本当です）を前にして若い職員は満更でもなかったらしい。

当社の田緒沿革を洩々と立板に水を流すごとく喋言りつづける職員に彼女らから時々質問が出る。その一人一人に答えなければならない。その一人一人がまた別嬢さんである。あがるまい、あがるまいと、その職員は大いに努力をした。そうである

話がたまたま沖ノ島のことに触れる頃、彼女たちの顔付が厳肅になった。神域壮厳な内容に驚いたらしいのである。一人が

「あのう、その島には私たちでもお参り出来ますか」

「できません」

「なぜですか」

「昔からそうしているのです」

「なぜかしら」

「それは我国の民族思想によるもので、女性というものは穢れたものと考えられたからでしょう」

「まあ、随分だね。今はそんな時代ではない筈よ」

「では申し上げましょう。伊勢の神宮には三日ごとに参詣があります。昔はみんな幼いミコさんをつかったそうです。何故でしょう」

「なぜかしら」

「それはですね、幼女ではけがれを知らないからです」

「わたしたちも殆んどけがれていないと思うんですけど」

くすくと笑う声がした。それ以上はどうも説明しにくい。しかしこのままでは済まされない。

「それといいますのは、女性には生理というものがあります。それがいけないのです」

「いけない、と仰言いますけど自然的なものがけがれといえるでしょうか」

「生物学的にはそれは自然現象ですから割切って考えることは何でもありません。しかし皆さんは恐らくその年令に達していると思われますが（爆笑）、生理の時には平常と違うでしょう？（静かになる）考え方も消極的になり、行動もつつしむようになるのではありませんか。そのつつしまなければならないという点が所謂けがれなのです。だから一人前の立派な（ここに力を入れる）御婦人である皆さんは沖ノ島様にはお参り出来ないということになるのです。お分りになりましたか」

彼女ら一斉に黙る。「立派な御婦人」を自認したらしい。

節分祭斎行

三日、恒例の節分祭がとり行われた。午前十時、拝殿には郡内の氏子会員、総代さんらが居並び、拝殿階下には田島の幼稚園児が居並んだ。

祭典が終って園児たちには福豆一袋ずつと玩具（ヨーヨー）が一ケずつ手渡された。喜んで飛び跳ねるようにして帰って行った姿が可愛いかった。

終日「厄除けの日」にあやかって自動車のお祓いが続いたようなかな日であった。

同日大島中津宮でも賑やかに節分祭を斎行した。

宗像大社社務日誌抄

一月七日　新年献詠歌会、来会者廿名

一月九日　県警本部北九州連絡所（白バイ、パトカー）四十名特参。少年剣道新年稽古始め。

一月十日　境内恵比須神社祭斎行。県警本部長他来道関係者特参

一月十一日　万葉歌碑彫刻の為福岡山野石材店工匠四名作業開始

一月十一日　本日営業車関係鉄道関係特参多し

一月十二日　宗像警察全署員特参。本日万葉歌碑彫刻完了

一月十三日　十一時新殿感謝祭斎行終って鏡開きを行う

一月十四日　羽衣崇敬会百廿名特参

一月十五日　九時月次祭斎行。十時成人祭、参列百九十五名。久留米宗像奉祠会員百廿名特参。

一月十八日　総代二名職員二名、勝浦の手洗用石（新設計画）を下見に出向

一月廿日　宗像マラソン挙行

一月廿二日　宮司他職員一名社用の為上京

一月廿四日　社務所に於て郡教育委員会の講話会。講師は当社難波江講師

一月廿五日　職員八幡宗像会出席

一月廿六日　文化財防火施設打合会

一月廿八日　権宮司剣連郡支部会に出席。

一月卅日　境内東側買収地埋立開始

二月一日　十時月次祭斎行

二月二日　万葉歌碑造園工事開始

二月四日　右工事終了。献詠歌施工戸畑市蒲原清風園

二月五日　職員第一班祖祭旅行出発

おくにち祭

九月九日（旧暦）の「おくにち」は志賀海神社の秋の大祭にあたる。この間、初冠の儀式を済ませてから田島の宗像宮に参詣をしたあと、名島城の饗炙隆景に見参して、秀秋は再び志賀島に戻っていた。一人前になった今年からは、志賀島の「おくにち」に大宮司同磯業と共に祭典に奉仕することになり、その三日前の九月六日から参籠潔斎にはいった。勝山の上のお社の前に祀官の参籠殿があった。この大祭には、他の神社と違って少々厳しい戒律がある。大祭の参籠中は朝夕二回崖下の海中に入ってみそぎをしなければならない。秋も深まって海水は冷たい。その上、海水を浴びたあとの外気はもっと冷い。海も穏やかな日ばかりは無い。雨の中を馳け出して行って玄界灘の荒波に飛び込むこともある。御祭神が綿津見（海）三神であることから、海の部族の戒律として古くから伝えられ要求されてきたのが此のみそぎ行事である

「どうや、冷たくはないかの」

「なんと大宮司磯業は秀秋をいたわっている」

「なんの」

歯をくいしばってこらえる秀秋の生真面目な顔付をみて、磯業は大声で笑った。漸く大人になったばかりの秀秋のりきみようが、いとしくてたまらぬといった、いかにも楽しそうな笑い声である。幼い時から預って手塩にかけて育てあげたが、こうして一緒にみそぎをする時の身体つきはもう立派な大人である。学問、武芸も一通りはできるように思う。最近、物思いをするようなそぶりを見せる秀秋の様子に、何かあるな、とは思っていたが知らぬ顔をして過してきたが、それが丁目の前で冷たい海に潜って真剣にいきばっている秀秋の顔を見ていると、磯業は自分の思い過しのようにも思われて、何やら心のかげが晴れて行く思いがするのであった。

×

出陣の大鼓を思わせる雄壮な響きを博多湾にまでとどかせた夜中の神幸祭に引き続き、翌朝の「おくにちまつり」は無事終了した。今年から始めて奉仕した名島の若君の噂は忽ち志賀島のうちに広がった。つい此のあいだ元服したばかりの凛々しさと、その立居振舞の急に大人びて見えたことも限りない信頼感があった。村人たちがわがことのように喜んだ。

奉仕を無事に終えた磯業と秀秋はお社の山のすぐ下にある自宅に戻った。参籠以来まる五日目のことである。

「おつかれであろう。ゆっくりと休まれるがよい」

そう磯業にいわれて、秀秋はにっこりと微笑んだ。母屋の裏手に矢場がある。その道場に離れ座敷があり、そこが彼の居間になっていた。

居間に入って白衣を普段着に着替えると、彼は文机の前に坐った。召使いのおとき婆やが茶道具を持って来て、それから彼が脱ぎ捨てた白衣を抱えて部屋を出ると、入れ違いに源三がすっと入って来た。一礼すると、にやりと笑って口を開いた。

「若君、ようつとめられましたな、名島の大殿もさぞ喜ばれましょう。祝着に存じまする。さて」

とういい乍ら源三は懐中に手を入れた。或る予感がして秀秋はその手許を見つめた。

「若君」

一と膝進めた源三の顔はもう笑っていない。

「宗像の放生会の日、それがし若君の仰せを承わり、かの御歌を女房鷹籠の付き入人に届けましてございまする。其の後いかが案じておりましたところ、昨日のおくにちの日、宗像宮よりの奉幣使に付いて参りましたる若党より此の御文を渡されましたる次第」

すっと抜き出した手で、朽葉色のふくさに包まれた文筥を取り出し、片手をついて右手に捧げ持って秀秋に差し出した。

「うむ」

何ともいえぬ複雑な感情が秀秋の五体をかけめぐった。殊更に平静を装った彼の表情を素早く読みとると、源三は

「いかが、でございましょうな」

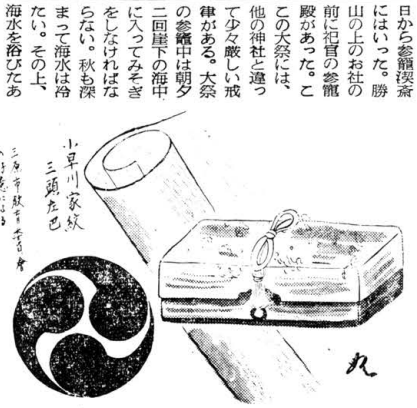
といった。付き入として、今は源三の方が冥剣な顔付である。

黒漆に金蒔絵の文筥の蓋をとると、薄く縒られた薄色を刷いた紙には水茎のあとも美わしく

たしまの木ぬれ郭よひつゆしげきまま　こもりるのあきかぜをなげき　ほのかにも見まつりのはのみうたなつかしみつつ　かへし

秋かぜのゆふべのにはにおもひをりさをしかの声身にしみつゝ

かぐわしいきらの匂いが燻きこめられて、こうしるされていた。読み終った若武者の顔色が、午後の陽にひと際明るく輝やいた。



鐘音岬（かねのみさき）（三）

山下半可　作
深田無庵　画

八幡宗像会新年総会開かる

大谷会館に於て参会者九十名

―本年度計画等きまる―

去る一月二十五日八幡市大谷会館に於て八幡宗像会新年総会が開催された。その様子を八幡市のT・Y氏より報告して来たので御紹介する。

謹啓厳寒の候

各位御壮栄の段お慶び申し上げます。八幡宗像会総会の際は久保宮司様から御祝電を頂き、又小野楓宮司さんの御参席をいただきまして、その上御神酒を頂き会員一同有難く頂戴致しました。誠に有難く厚く御礼申し上げます。

なお、総会の次第報告致します。

八幡宗像会総会

昭和三十七年度八幡宗像会総会を一月二十五日大谷会館にて会員百十三名中九十名出席のもとに午後五時より一時間映画を観賞、六時山路虎夫副会長の開会のことばに始まり、安永渡平会長の挨拶。還暦者に記念品を贈り、三十六年度決算、及び会務報告があった。懇談の際、本年度特別行事として五月二十七日沖島沖津宮大祭に参拝、出光興産徳山製油所見学、十月一日家族同伴にて宗像放生会に宗像大社に参拝する等、の計画はもって総会終了。引続き盛大なる委員一任に決定しました。最後に安部理事の閉会のことばを開宴となり、一同心ゆくばかりの歓をつくし和やかに解散した。

八幡　T・Y生

手水鉢

一体どれだけの人がこれで手を清め口を濯いだことであろうか。

来る日も来る日も御祈願の人は絶えない。水源は約五丁離れた深田部落の「ひなた」の水を引いて来ている。水質は田島では最も良い。見るからに簡素なたたずまいながら、この水質のよさと尽きることのない姿が、これまた当宮の御神徳のあらわれのようにも思われて感慨深いものがある。

境内の梅もほつほつ咲き初めた浅春のひとときー。

随想　酔人

これは粋人ではない。寒ろ無粋人を指すかもしれない。山陰線の汽車の中、窓にはみ出すかのあたっている。日本海はどんよりと暗く、靄の色も黒い。時に雨が降っている中を日が射す。ただでさえ重苦しい旅の気分である。

突然、向うの方で酔人が叫んだ

「すーいすいすいたらたった、すらすらすいすいすーい」

大きな声にびっくりして車中の者が一斉にその方を向いた。見ると紳士風の若い男が何回も同じ文句をわめいている。どんよりと濁った目は何処を見ているのかわからない。いっとき静かになったと思ったらうなだれて眠った格構をしている。車中の者がやれやれといった風に落着いた。

と又突然

「すーいすいすいたらたった」

前よりも一層声を張り上げて立ちはった。

今度は乗客も騒ぎ出した。

「あのそばに坐らなくてよかったね」

「酔いどれ、うるさいなあ」

「あんなのがまだいるんだね」

「仕方がないさ」

ほそぼそと呟いて、終いにはあきらめるより仕様がないと、いった様子である。

目をさまし、酔人は立ち上ってじろじろと車内を見渡した。誰も相手にしない。周囲に坐っていた人も他所に場所を移した。誰も相手になってくれないことを何と思ったか、酔人は、今度は通行人の前にいちいち立ちふさがってその人の鼻を穴のあく程のぞきこむ。何れも顔をしかめて逃げるようにして通り抜ける。

恥も外聞もなくして「人間」を喪失した酔人程醜いものはない。人間はおろか神にさえも見放されることをその酔人が知っているかどうか。酔っぱらって馬鹿のまねをして人生を送るのもよかろう。人間世界を逃避する手段としては最高かもしれないから。

（H・Y生）

第五回　宗像マラソン大会記

去る一月二十一日、伝統のある宗像マラソンが開催された。当日早朝宗像大社神門前に勢揃いした参加者は五十三名、十時明会、同十時三〇分競技を開始、全正午終了。コースは大社―東郷橋の折返しで行われた。終了後、大社の玉垣内に於て賞品授与、挨拶、講評等があって解散した。当日、晴天であったが風は稍強かった。寒風の中を完走した参加者たちの若々しい頬が紅潮していた。楢宮司の挨拶要旨は左の通りであった。

この寒風の中を皆さんよく走って下さいました。伝統ある宗像マラソンが若い皆さんたちによって立派に行われていることに感謝の意を表します。

さて、今日走った皆さんは全部が偉いのです。なぜなら、苦しいマラソン、あらゆる競技中で最も地味でありながら辛いといわれるマラソンに参加して完走されたからです。一等になった人にはその努力と鍛錬を尊いものに思います。しかし私はビリから一番の人にも同様の敬意を表します。

どうか皆さん、これから長い人生の将来にわたって、皆さんの前途には幾多の困難があると思われます。その時に、今日宗像マラソンで嘗を喰いしばって頑張り通したことを思い出して下さい。嘗を喰いしばって理想に邁進するのが男です。情熱の火のたぎるところ、飽く迄も男らしく頑張り抜いて立派な国民になられることを希望いたします。

なお、当日の成績は左の通りです。

福岡市三浦祐三（福間町、大濠高校）

○一般の部

一位　秋吉和俊（福岡市、大濠高校）

二位　斉藤勝巳（〃〃）

三位　吉水久喜（宗像町、福岡農高）

○青年の部

一位　平川恵一（宗像町）

二位　宮嶋英樹（宗像町）

三位　簡口英弘（〃）

○中学生の部

一位　田辺和則（福間中）

二位　早川邦彦（玄海中）

三位　中野和美（〃）

町村往来

消防出そめ式　5日午前10時大島村（大島小学校）△6日午前9時半玄海町）玄海中学校）△7日同福間（宗像両町（福間中学校）△8日同津屋崎町（津屋崎小学校）

新生活運動推進報告会　町村婦人会主催でつぎの日程で実施。時間はいずれも午後1時から。

▽6日宗像町（河東小学校）14日大島村（大島村公民館）15日玄海町（池野小学校）17日津屋崎町（水産高校）21日福間町（福間小学校）

玄海町健康診断　6―8日田島、9―15日神湊、12―18日岬、18―22日池野

結核健康診断の一般住民対象者は六十人。診断は無料。

津屋崎町婦人講座　校区婦人会が共催、つぎの日程で実施。時間はいずれも午前10時から午後4時まで。青年研修所。△7―9日スウェーデン刺しゅう△12―14日アフガン編み△20、23、26日レース編み、モヘヤ刺用△28日総まとめ

宗像町一元集荷推進委員決まる　同町では町内の酪農家から福岡、北九州の乳業会社へ送る原乳の輸送ルートを一本化するため、7日「宗像町一元集荷推進委員会」を結成つぎのとおり委員を選出した。

△委員長天野実夫△委員谷口勇林利夫、川内輝明、伊規須光男、水上茂武、中村嘉也

宗像町農業委員会　9日午後2時、役場で農地の転用について審議。

萬葉歌碑完工式　郡万葉歌保存会では宗像大社正門入り口に万葉歌碑を建設中だったが11日午前10時半から完工式を行なう。

郡青年主張大会　郡青年団主催で11日午前10時から河東小学校で郡内町村から二十五人の代表が出る。

大島村老人クラブ結成　11日午後1時、大島村公民館、六十五歳以上のとしより百六十五人が加入。

萬葉歌碑除幕式　11日午前10時半から宗像神社境内の現場で除幕式をあげる。

宗像町防犯懇談会　12日午後7時河東小民館、13日同平等寺公民館。重松宗像警長の話がある。町婦人会主催。

福間町養豚組合結成　12日発会式をあげ、つぎのとおり役員を選出。組合員は八十二人、養豚技術の向上と経営の合理化で農家経済の振興が目的。△組合長藤野満△副組合長大庭好実、渋出千次郎△会計古賀利治△評議員竜口茂行ほか六人△監事藤浦勇、脇野力

津屋崎町映画字級　20日岡の二、21日北、22日在月、23日須多田、24日西東、25日上松、26日下松、27日本村、28日山添、3月1日練原、映画は『宿題』と『母への贈りもの』の時間はいずれも午後7時半。

北部会研究会　玄海町小学校研究協議会は9日午後1時半から岬小学校で五年の学習指導について研究。

津屋崎町の婦人講座　15日午前10時から青年研修所で町内の婦人会員代表者を集めて映写機の操作技術の講習がある。

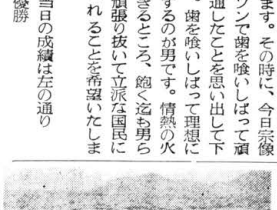
大島村玄寿会発足　六十五歳以上のとしより百三十五人でこの程結成した。会長真鍋英雄、副会長中村等三郎、顧問に大島俊基村長ら四人、委員六人を選出した。同会は毎月一回集合するほか、明るい村づくりなどに協力する。

小中学校図工科研究会　15日午後2時、東郷小学校、講師に京都学芸大学松田清人教授を招いて研究。

野坂老人学級　16日午前10時野坂公民館、（西日本新聞より）

冷たい水にザンブ

宗像郡大島村　ウニ取り真つ最中



○……玄海灘の離れ島、宗像郡大島村ではいまウニ採取のまっ最中。かんんなゴム製の潜水服に七・五キログラムの鉛を胴に巻いた若いおんなたちが、凍りつくような冷たい海中にもぐって、小さなカギでウニをひっかけ、取っては海面に浮いてくる。女の手で一日五千円以上もかせぐベテランもいるという。

○……陸揚げされたウニは漁協婦人部加工グループの手でカラを割ったうえ、ハシでいちいち中身を選別して、タテ一〇センチ、ヨコ五センチていどの小さな木箱にきれいに並べて、生ウニとして福岡、北九州方面から買い付けの業者に渡す。いま取れるウニは〆紫ウニ〆で、昨年まではアルコールづけだったが、ことしから初めて生ウニに加工して送り出しているが、玄海灘育ちだけに風味と色あいを歓迎されて、各地からひっぱりだこだ。

（2、7西日本新聞）

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

宗像伝説　その十四

狐をだました福間の又ぜえ（又左ェ門）

福間の奇人として有名な又ぜえのお話しを一席。

或る日又ぜえは博多の方から馬をひいての帰るさ、音に聞く福間の花見松原にさしかかりました。すると十七八の娘がきれいに着飾ってしゃぼりと立っているのに出合いました。むろん此の花見松原に古くから住む〆おさんぎつね〆です。又ぜえは「ははあ」と思いました。ところが狐は、今日は一つ又ぜえをだましてやろうと思うものですから

「もしもしおじさん、私をその馬に乗せて下さいませんか」

といいました。又ぜえは

「よおざんす、どうぞお乗りなさい、ただしこの馬はゆし荒いから、ようっと落ちんように」

こういうと鞍の上にがんじがらめにくくりつけ、知らぬ顔をして歩き出しました。

しばらくして松原を過ぎて里近くなりました。狐はあわって

「もうよございます」

しまいには泣き声を立てて頼みましたが又ぜえは胸に一物あるものですから、とうとう福間の町まで来てしまいました。

いつもみんながだまされる〆おさんぎつね〆がつかまったげな、という近郷近在の人が押しかけました。

「こんちくしょう打ったたけ」

と人々がいきりたちました。それを又ぜえが押さえました

「まあまあそんなにしなさんな、これからはおとなしくするじゃろう」

おさんぎつねは何ともえそこいましたが、ほっとして又ぜえにお礼をいいました。

「このご恩返しに何なりとお役に立つことがありましたらさせて下さい。」

しんじつ真心をこめて申しましたので

「それでは金の茶釜になれるかね」

「お安いことです」

いいも終らぬうちにまぶしいような金の茶釜に化けました。

又ぜえは早速これを博多の隠居さんのところへ持って行って高く売りつけました。

大喜びの隠居さん「先ず一ぷく」と茶釜に水を張って炉にかけました。ところがおさんは尻からあぶり立てられてたまりかね

「あちちち―っ」

しっぽを出して逃げ出してしまいました。中の水が炉の中にこぼれたからたまりませんぼわーんとばかりの灰かぐら。

又ぜえの奴、だましやがったなかんかんに怒ったご隠居さんおっとりがたなで又ぜえの家にとんで行ってみると、あにはからんや又ぜえはうんうんうなって寝ています。

「昨日は俺をだましやがって」

ぶるぶる腹かいてご隠居がいいますと又ぜえは

「どういたしまして、こちらの通の私は十日も前からからだ中はれものが出来て悩んでおります、どうしてそんなことをしきりましょう。こちらこそおおきにおさん狐にだまされたんとちがいますか、うんうん、ああいたい」

この有様にご隠居さんもだあ、となって帰って行きました。そのあとで仮病をつかった又ぜえが舌をべろり。

むっくりと起き上った又ぜえは体に貼りつけた芋汁とおでき膏薬を洗い流し、近所の菓子屋で饅頭を沢山買って花見松原へと急ぎました。おさんぎつねの穴の縁まで来て

「おいおさんどうした、今日は見舞に来たぞ、まんじゅうを持って来たよ」

というと、子狐どもが大喜びで飛び出して来ました。みんな並んで手を出して頂戴々々をしています。すると穴の中から声あり

「こちらこそお前達、手をつけてはなりませんよ、又ぜえさんの饅頭はかま馬の糞だよ、人間にだまされてはいけませんよ」（T）

物質文明より人間尊重へ（その四）

出光佐三

（前号につづく）

今の若い人は全体主義と聞けば悪いことだと教わり、すぐにファッショに結びつけ、戦争になるように思っているが、これは大きな間違いである。今の若い人がそのように考えている全体主義は、本当の全体主義ではない。そのような全体主義は、独裁者が自分の野心、利己心を達成するために、全体をまとめる手段として全体主義という美名を悪用したのであって、利己主義が手段を選ばず、全体主義を悪用したにすぎないのである。個人主義はあくまで個人に固執する己れにとらわれた考え方であり、日本人の全体主義――が外から押しつけられた名称であるが――は、自分を離れ無私の姿となって全体の平和幸福を目標とすることを前提とする。そして全体を考える場合には個人を離れて全体に溶け込む無私の考え方である。個人主義の生みの親であるところの独裁の思想とは絶対に相反するものである。諸君は全体主義というものを悪く間違って教えられているということを知らねばならぬ。

鈴木大拙先生がおっしゃることには、人間というものは二人以上いるから個人というものがあるので、一人なら個人も全体もない。

二人以上で社会をつくるならば、個人は全体の中の個人でなければならない。全体をつくるための個人でなければならないということである。私もそのとおりだと思う。離れ小島に一人で住んでいるならば、どんな勝手なことをしていに信じあい融和し、一致団結して、お互いの平和幸福のために、一人以上で生活しているのであるから、まず他人に迷惑をかけてはならないということになる。ここに真の人として歩く道がある。すなわちこれが人の道、道徳であり、モラルと異なるところである。

ここに注意すべきことがある。

全体を考える場合に個人はどうでもよいかということである。良き細胞とは、全体が出来るのであるから、人類の平和幸福を確保するに足る尊重すべき細胞、すなわちこの意味での個人であらねばならぬ。わが国において古来人格の養成、鍛錬、修養が特別にやかましかったのは、尊重すべき細胞をつくるためであった。

かくして人間の本能的矛盾性、わがままを戒めて対立闘争の域よりのがれ、お互に助けあって、お互いの権利を尊重し、お互いに世間への義理を考え、人情を加えて、お互いの自由を尊重し、お互い人間尊重の方面に進んで、聖人、君子、偉人、先生というものはみな清貧を誇るという思想さえあって、一面においてむしろこれが行きすぎておった形であった。しかしながら、これが数千年の間続いたので精神文化、心の世界は極度に発達して、世界にすぐれた無聖なる恋愛を自由という美名にかくれて猥褻なるものに書き上げようとする。これが数千年の間続いたので精神文化、心の世界は極度に発達して、世界にすぐれた無聖なる恋愛を自由という美名にかくれて猥褻なるものに書き上げとである。良き細胞によって良き格の矛盾性のために対立闘争となって、平和というものは絶対に望むことができないというものである。

この個人主義が日本にはいったのは明治時代である。それまでは日本人は物質尊重の必要もなく、ひたすら人間尊重の道を歩いたため、物質は卑しいものであるという思想をもった。社会の上層階級として任じていた武士は、金ということを口にするのもつつしんだくらいに物質を嫌った。ひたすらに外国から物質文明が輸入されてから物質文明の重要性を知り、これもおろそかにしてはいけないということを知って、これがとり入れにいそがしく、その結果、国内にある意味の混乱も起こり、物質文明が派手なものであり華美贅沢を伴っているので、ここにいわゆる外国かぶれの思想が出来たのである。

その当時、私どもは子供としてこの個人主義、自由主義、権利思想、というものを唱えている人を非常に悪く思った。当時、真剣に個人主義、自由、権利の思想を主張した政治家、言論界、あるいは学者というものは立派な国士的の人々であり先覚者であったのであるが、これを実行している人が非常に悪い人であった。たとえていうと、三百代言という言葉があった。その言葉の意味は、大衆が法律に暗いのに乗じて法律の欠陥を悪用して、屁理屈を言っては大衆をだましたり、恐喝したりして金を巻き上げるということをいったのである。その他、自由をかさして放埒なことをやる。あるいは神聖しく見え、悪い人と考えられたわけである。

現代の日本は最も人間の矛盾性を発揮している時代である

それで、さきほどからいうように、個人主義というものは、結局、人間がやれば人間の本能的性質、人間というものは絶対に望むことができないというものである。

この個人主義が日本にはいったのは明治時代である。それまでは日本人は物質尊重の必要もなく、ひたすら人間尊重の道を歩いたため、物質は卑しいものであるという思想をもった。社会の上層階級として任じていた武士は、金ということを口にするのもつつしんだくらいに物質を嫌った。ひたすらに外国から物質文明が輸入されてから物質文明の重要性を知り、これもおろそかにしてはいけないということを知って、これがとり入れにいそがしく、その結果、国内にある意味の混乱も起こり、物質文明が派手なものであり華美贅沢を伴っているので、ここにいわゆる外国かぶれの思想が出来たのである。

その当時、私どもは子供としてこの個人主義、自由主義、権利思想、というものを唱えている人を非常に悪く思った。当時、真剣に個人主義、自由、権利の思想を主張した政治家、言論界、あるいは学者というものは立派な国士的の人々であり先覚者であったのであるが、これを実行している人が非常に悪い人であった。たとえていうと、三百代言という言葉があった。その言葉の意味は、大衆が法律に暗いのに乗じて法律の欠陥を悪用して、屁理屈を言っては大衆をだましたり、恐喝したりして金を巻き上げるということをいったのである。その他、自由をかさして放埒なことをやる。あるいは神聖しく見え、悪い人と考えられたわけである。

（つづく）

稲元の経王塔

滝口　正

二月四日久方ぶりに経王塔を訪れた。雪解けに濡った落葉がひとしお淋しく、霜ふくらむ苔椿と手を差し伸べるような木蔭の蘚鉄が、そそろに昔の面影を偲ばせる。

経王塔　奉書一字石
山王社広前
右側面に　寛政元乙酉天
十一月吉祥日
邑中諸願不起
福寿増長祈所

と鮮かに刻んである。

山王社は已に八幡神社の境内に遷され取り残された経王塔の存在は次第に信仰から遠ざかる運命にある。数年前具島禅師を誘った際、氏は山王社の地下には潜伏が潜てあり、経王塔には法華経の一字石が封じてあると断定された。

すると経王塔は現状では孤立して居るが山王社との関係については尚問題が残されているように思う。

寛政と云えば百七十年前の昔で当時医術も幼稚で医薬も普及していなかっただけに伝染病が悲惨を極めたであろうことは頷かれる。又牛馬金銭の供養とも伝えられるが起願の意味から察して人間が主体であったことは間違いない。

ではそれ程尊敬された山王社の本体は何なる功績を残した人であったであろうか。当時釣川は蛸がうねり歩くように洪水の度毎に其位置を多少変えており、未だ完全な堤防の築かれてなかった事は釣川流域の田久、土穴、稲元、東郷、河東其他関係の沿線部落の境界が現釣川を挟んで入り乱れている事実から証明される。

勿論詳細は知る由もないが恐らく藩主が安定した徳川治政の下に河川の改修築堤などが尊い農民の奉仕と犠牲に依って完成されたものと思われる。

徳行を偲した山王社の本体は多分庄屋格で、之等土木事業の功績からみても勿論凡ゆる面の尊敬の厚かった事は想像される。

尚稲元と土穴の境界に俗に野崩横堤と呼ぶ堤防があり道路兼用のしぶきに苦しみながら十数時間に対する一般の尊敬の厚かった事は想像される。

尚稲元と土穴の境界に俗に野崩横堤と呼ぶ堤防があり道路兼用のしぶきに苦しみながら十数時間に亘る健斗を続けて来たが高波は益々猛威を振い、今や身心労れ果て危機一髪に迫った瞬間であった。「頑張れ今一息ッ、神のお告げで人柱に立つぞ、それ打ち込め……」闇に千切れる悲壮な叫びに「それ人柱だ犬死させるな」一丸となった群衆は夢中で土俵を打ち込んだ、斯くして間もなく凱歌をあげ、ずぶ濡れの農民達は抱き合って感泣した。

美談を聞かせて貰ったが何分子供の記憶として真実については御想像にまかせた。

一つは粕屋郡の或る溜池工事で某監督奉行が農民の苦労を察して百年の計の下に必要以上の水田を潰したかどで厳しく責任を問われ、申し開きに切腹して謝罪した。農民たちは池のほとりに碑を建て池の主と呼んで永久に遺徳を讃えた。

もう一つは、或海岸地帯数千町歩の稲田を守る水門を挟んで今だかってない季節暴風雨との攻防戦が開展した。総出動の農民達は終海のしぶきに苦しみながら十数時間に亘る三文文士という言葉もあった。

個人主義、権利思想、自由思想というものは派なものであったにもかかわらず、このようにこれを看板にして悪用する人々が多かったのである。私ども子供は、これらの人々は非常に卑しい人、恐ろしい人として毛虫のごとく嫌い、権利、自由という言葉も悪く考えていた。

今日になって思うに、当時日本には古くから鍛磨されている道徳、家族制度、淳風美俗等が円熟していて、これらの中に人権、自由というものが大きく含まれていて、いわゆる民主主義的考え方は従来よりあったのであって今さらと新しく権利とか、自由とか、民主主義とかいう必要を感じなかったので、外来の思想が国民大衆には強い影響力をもちえなかったとも見られる。もちろん、日本古来の精神文化にも多くの弊害が起こっていたことは争えないことであって、これを是正するのに外来思想が大きく抱擁している文化をもっている日本民族から見て、権利、自由を悪用する人々が極度に嫌いとなるのである。

（つづく）

○中津宮二夜三日の神事

昭和三十六年十二月八日午前九時過ぎ――郎々韻々としたノリトの声が、中津宮の神域にひびき渡っている。神前には村の農業者の幾十人かの人々が、ノリトの内容をかみしめるかの如く坐している。

――享保十七年の大きゃんの際、庄屋大島弥一郎重高は己が身もたな知らに、村の農民たちの為に訴の罪に問われ、ついに捕えられて獄舎にありけるを農民たちは悲しみ嘆かいて、中津宮の大前に二夜三日の夜昼かけて忌垣とこもり、其の罪の赦されし事を一すじに乞奉りし効も著く、元文二年三月にはその罪を赦されあまつさえ、租税も軽くなりたるを嬉しみ辱なみて、大神の御恵みと庄屋の高き徳とを万代に忘れじと、年ごとの例のまにく――

ノリトの奏上を聞く農民は毎年共にするのである。

これが三百年を越ゆる今日尚も続けられているのである。

○享保の大飢饉

今から三三〇年前の昔、徳川八代将軍吉宗の時代、享保十七年の大飢饉と、その前後の流行病の為百万人に近い餓死者を出したといわれる「享保の飢饉」の状況を吉川弘文館の国史大辞典でのぞいてみよう。

宗像道徳集（一）

享保の義人　大島弥一郎伝

越智汎愛

「享保十七子年の年西海道の疫癘と飢饉とに豊前小倉の内男女七万人の疫餓死あり、肥前佐賀の内男女十二万余口の疫餓死あり、又筑前国内凡三十六万七千八百余口中、男女疫餓死人九万六千七百二十口、其上も同十八年癸丑の夏六月より秋の半に至り、日本中一統に疫病流行して、大阪三郷の市中にてさえ、風を煩う者凡三十三万七千四百十五人（中略）西国辺凡四百八十万石程稲虫が、食うに食なく、病みて薬石なくて、うえと苦痛にもがき死んで行った事実を知る時、私達は祖先の苦悩を今の如く回想してはうたた感慨にたえないのである。

○享保の治

八代将軍吉宗は、徳川御三家の一つである紀州藩より立って、享保元年八月に将軍となり、以来三十年間諸藩の改革を行い、その一連治世を「享保の改革」と呼ばれている。そして享保の大飢饉当時は彼の慈悲時であったようである。即ち十七年四月には曲水寮を催し、九月には草庵財法を吹上で行っている。然し幕中の盛寮のその下では、すでに世の大悲惨事が押し寄せていたのである。まことに、世の中はまっならぬ事を吉宗はなげいた事であろう。

享保十年から六年目、元文四年には甘藷先生で有名な昆陽青木文蔵が幕府に召出されている。その後、彼の「藷諸考」で、さつまいもが世に広まって行った。昆陽は西海の大飢饉の再来を防ぐ一つの方法として私たちに「いも」を教えてくれた。大東亜戦争前後の食糧難には私たちはこれですいぶん助かった事を思い起こす。

さて、それは兎も角話を前に戻して、二三〇年間、すっと厳修されて来た、中津宮二夜三日の神事について、明治年間の宗像郡長宮本氏の碑文や大正年間の野口校長の宗像遺徳集及び大島家の過去帳や、享保年間の大島安昌院の過去帳を参考にしながら、その由来や継承や現況についてもっと述べてみたいと思う。

（つづく）

× ×

子守歌について（一）

編輯部

さて、わが国の子守唄はたしてどのような内容をもって唄われたのであろうか。

子守歌の種類

一、普通に寝かつける目的で、文句もその内容に添ったもの。「ねんねの唄」が中心となっており、全体としての種類のものが最も多い

諸国例歌

ねんねのお守はどこへ行った、あの山越えて里へ行った、里のお土産になにもろた、でんでん太鼓に笛の笛、起きあがり小法師に振りつづみ、たたいてきかすにねんねしな、ねえんねえん、ねえん、ねんころり（東京）

ねんね小山の口夜口、山を越えて里さ行く、里のみやげになにもらった。ぴいぴいがらがら豆太鼓、でんでん太鼓に笛の笛、起きあがり小法師、ねんねしな（富山）

ねんねなさりませ、お休みなされな、明日の御飯があるまで、明日の御飯は何時あるまな、時は九つ夜は七つ、こいこいこい（京都）

ねんねんさっしゃりませ、ねた子の可愛いさ、起きて泣くこのねんころろ、面憎さ、起きて泣く子の面憎さ（広島）

ねんねよねんねよねんね、ねんねこさいろくおかめの子、おかめの守さんどこへ行った。山を越えて里へ行った、里の土産に何もろた、てんでに赤稲に張の鼓（高知）

ちょこちょんべで船買いに、船は買わずに馬買うて、赤馬十四白馬十四、黒馬十四、三十四の馬は、何処についておいたか三本松の橋の下、なに食わせて置いたか、去年の翌殿、今年の豆殿（福岡）

右は諸国の例歌のうち内容や冒葉に特色のあると思われるものを選んだが、これらの内容は殆んど全国的に交流している。

二、子守が自分自身の境遇をなげいて唄うものが沢山ある。

自身を慰め、また泣く子に困りはてて守奉公の辛さを吐露したもの、雇傭主に対する不平をぶちまけたもの、同年輩の者に対する反感や嫉みを訴えるもの等があるこれは「一」のねんね調からは逸脱しており、即興的な言いまわし等も多いが、いろいろな子守の感性を捉え得て面白い

諸国例歌

いやだいやだよ、守子はいやだ親と月夜はいつもよい（千葉）

憎いおかみさんの横目の目玉、つついてやりたい竹槍で、よいよい（埼玉）

俺らはだてで死んだに劣る、泣けば貰えたと思われる、だませばだまされたと思われる、眠れば殺したかと思われる、うだてうだてよ、子守はうだて（山形）

（つづく）